
殺人返し。するつもりです。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人返し。するつもりです。

【Nコード】

N6150Z

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

さて、とある少女が一人の少年を理不尽な理由で殺しに行きました。

「あなたのお兄さんに私の妹を、殺されたのであなたを殺しに来ました」

！！

『！』に脳内を踏み荒らされるような奇妙な感覚に陥る。

目が乾いて、フラッシュをたかれた様な錯覚、全身の力が抜ける。

——あの兄貴ついにやってしまったか。

「えーと、理解できてますか、もう一度言いますね」

「いや結構です、ちゃんと理解出来ました」

——最悪だ、人生終わった。

いつまでたってもこの男の人生は兄に食い潰されるものだった。

優秀で猫かぶりな兄。被った猫の皮を剥けば害悪としか言いようのない兄だった。

「いつ、俺はいつ殺されるのでしょうか？」

「え？ いつ？ いつでしょう、今でしょうか？ いつがいいですか？」

おそらく彼女はいつ殺すかなど考えていなかったのだろう。いや、出会ってある程度説明をしたらすぐ殺すつもりだと考えたほうが正しいのかもしれない。

彼女は若干呆けた後、鞆から果物ナイフを取り出す。

「えーと、何かやりたい事があるのでしょうか？ 無ければ今殺します」

彼女は彼女なりの結論に到達する。おそらく、最短、彼女にとっては最大の譲歩である。かなり直線的な結論である。

「えーと、一つ遣り残したことが」

「なんですか？」

「言わないといけませんか？」

「出来れば教えて欲しいです」

「出来ないので教えません」

彼は、若干震えながら言葉を紡ぐ。声も上ずり震えていて迫力の欠片も無い。普通ならこの選択は『ハズレ』。

「わかりました、では、私は一旦帰ります」

彼女は『普通』ではない思考ルーチンで形成されていた。と、言うよりも。どこか頭の螺子が緩んでいるないし、抜けているということは第三者から見ても容易に想像することが出来るだろう。

「はい、わかりました。では、また」

この少年もまた『普通』ではないのだろう。

「では、また」

少女は踵を返し、少年はその場にへたり込んだ。今はまだ8時、早朝である。

昼頃

「最悪だ、あのクソ兄貴。本当に最悪だ」

少年は一人、家のリビングで泣いていた。

少年、高梨 裕太はまだ高校2年生で青春真っ盛りである。彼女もいなければ、ましてや、デートもしたこと無い。まだまだ青春これからだ。そう思っていた。

「うっ、クソ、クソ兄貴」

高梨 裕太はもうあの少女から逃げられない予感を振り払うことが出来なかった。どこまでも追ってくる、逃げ切るビジョンが見えてこなかった。もちろんそんなのは錯覚であり、非現実的な妄想でしかない。そう自覚していても少年、高梨 裕太の中には逃げるという選択肢は最早、存在しなかった。

「……いやだ、……死にたくない、殺されるなんてもっと嫌だ」

鼻水もだらだらとたらし、恥も外聞も無い。どちらにせよ、今は平日の昼間、それにここは彼の家のリビングである。誰も彼の恥ずかしい姿を気にする者はいなかった。

ピーンポーン

「いいよな、お前はいつも軽快そうにピーンポーンってさ」

少年、裕太はインターホンを無視した訳ではないが、インターホンの向こうにいる訪ねて来た人間を無視した。

「はは、インターホンに愚痴言っでどうするんだよ？」

ピンポピンポピンポピンポーン

「誰だよ、そういう気分じゃないんだよ」

そう言いつつも玄関ドアを開く。

「三時間ぶりぐらいですね」

扉を開けるとあの抑揚のない少女がいた。

少年から生気がごっそり抜ける。顔面蒼白。

「えーと、聞いてますか」

「ああ、うん、上がりなよ」

「では、お邪魔します」

少女は靴を脱ぎリビングへと招かれる。

「泣いていたのですか？」

全く持って容赦の無い質問を投げかける。

「笑うか？」

「いいえ、私も妹が死んだ時悲しかったし、多分、自分が死ぬときも悔しくて泣くと思う」

裕太はキッチンにある包丁を抜き、少女の首にそれをあてる。

「私を殺すの？」

全くもって興味がなさそうな態度で質問する。

少年の持つ包丁が震える。

「私の名前は九市名 のぞむ、『くしなさん』でも『のぞむ』でも自由に呼んでくれていいですよ」

首に包丁を当てられたのぞむは自己紹介を終え、微笑んだ。

「お前、いかれてるのか？」

「あるいは、そうかもしれないね」

裕太は絶句した。よくわからない文字の羅列を理解できたような奇妙な感覚を覚えまた、その感覚に戸惑った。

「なんで、来たんだよ」

「えーと、どうしようかと思ったのですが、逃げられたら困るので、一応見張りにきました。迷惑ですよね？」

「え、えっと、うん」

「……そうですか」

のぞむは場違いなことにうつむき落ち込んだ表情をみせる。

「い、いや、でも、こんなに可愛い子に見張られるのは役得っていうか、その……」

「あの、慰めはいらなです」

裕太の表情が固まって。数秒してから融ける。

「はぁ！ 別に俺だってあんたを慰めるつもり無かったし！ てか、その、形式的に？」

「一応、ありがとうございます」

のぞむは礼を言いながら微笑みむ。

「私、結構落ち込んでたんです、大好きだったトオル先生の妹を殺されて、裏切られて、結構落ち込んでるんです」

高梨 透は常識人である。成績優秀、スポーツ万能、努力家で、

面倒見もよく、あらゆる人間から好かれる好青年。それが高梨 透

——表面は。

「俺知ってたんだ。兄貴がイカれてるって」

「……………」

「初めて違和感に気付いたのは、小学校三年の時かな『タマ』が死んだ時にさ、俺、スッゲー泣いたんだ、川で溺れたとかでさあ、なんか滅茶苦茶悔しかったんだ」

「タマとは猫でしょうか？」

「いや、犬なんだけど、まあ、その時初めて兄貴に違和感を感じたんだ、兄貴も泣いてただけで全然悔しいとか悲しいって感じじゃなくて、なんか涙が流れてるだけって感じでさ、変だと思ったんだ」

「小学校五年生の時かな兄貴に殺されかけたんだ。旅行先の吊り橋で落とされたんだ」

「難儀ですね」

「下が川でさ、ずぶ濡れで泳ぎながら、兄貴に助けてって何回も叫んだんだよ、そしたら、あいつさ俺を見下しながら笑うだけで、助けようとも人を呼ぼうともしなかったんだ」

「こいつ、人間の皮被った何かだって思ったよ」

「妹は気付いてたんです、トオル先生が悪い人だってこと。普通、孤児院なんかにはボランティアで来てくれる人が悪い人だと思わなくて。優しくて面倒見のいいお兄さんだと思ってたなかなです、妹は気付いていたんです。悪い人だって、初めからずっとあの人の事嫌ってましたから」

「妹さんは……」

「プールで勝手に一人で溺れて死んだことになりました」

「何で兄貴がやったってわかったの」

「わかったんじゃないです。あちらから勝手に僕が殺ったんだって恍惚な表情で妹の死に様を語ってくれました、最後まで私の名前を呼んでいたそうです」

「……そっか」

「あなたを殺してもあの人には何のダメージも与えられそうに無いですね、今まで付き合わせて御免なさい」

直線的で危ない思考回路でのぞむは裕太に見切りをつける。

「待って！」

裕太の顔には歪んだ何とも識別できない表情を浮かべる。

「何ですか？」

「少しでも悪いと思ってるなら手伝って欲しいんだ。一つ遣り残したことがあるんだ」

裕太の顔の歪みがだんだん表情を作る。――――笑顔。

「兄貴を殺したいんだ」

少女は一瞬目を大きく見開き、喜悦と恐怖の混じった笑顔を作る。

「いいですね、それ」

(後書き)

ジャンルは何に分類すれば良かったのか。

文学？ いやホラーか推理？ はたまたコメディーか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6150z/>

殺人返し。するつもりです。

2011年12月21日21時53分発行